

## 翻刻『万代大雑書古今大成』(三)

Reprinting: "Bandai Ozassyo Kokon Taisei" (3)

伊藤孝行

伊藤(二〇一二)の続きである『万代大雑書古今大成』(ばんだい  
おおざつしよここんたいせい)翻刻の一部を掲げる。本稿では「ろ  
一」より「に十六」まで掲げる。

### キーワード

近代語、翻刻、万代大雑書古今大成

### 凡例

- ・ 漢字の表記は、通行の字体に改めた。
- ・ 割注は△、▽で示した。割注中の改行箇所は／で示した。
- ・ ●は翻刻しかねた箇所である。今後の課題としたい。

### ろ一 六二四金神をしる事

毎年曆に出せる六二四  
金神の方角をしるために  
十干をこの図にあらはす也前々  
の事を逆にくりてしるべし  
きのえきのとの年ハ午未申  
酉の四方也ひのえかのとの年ハ  
子丑寅卯午未の六方にあ  
りつちのえみづのとのとしは

ねうしさるとりの四方なりかの  
えきのとのとしハたつみの二  
方にあるなり

### ろ二 爐ひらきの吉日

甲△子 寅／辰 午▽ 乙△丑 卯／酉▽ 癸△亥▽

### ろ三 六十の図の事

人の生れ性の多と又ハ何性といふ事を知ら  
んと思ふとき此六十図にて繰見るべしたとへバ甲  
子の年に廿五才になる人ハ何性にて生れ年の多と  
ハ何ぞと知らんと思ハバ甲子の所よりあとへ廿五かぞへ見る  
べし其あたる所かのえ子にて土性也これは人の生れ  
年なれば余ハ是に准じてしるべし尤此六十の図と云  
はきのえ子の年より又甲子の年まで六十年の間  
一廻りをしるせしもの也

六十図

木九からに

火三ツの

山に土

一ツ

七

金

にて

五水

れう

あれ

### ろ四 六がう日の事

此六合日といふハ財宝をもと  
め或ハ夫妻にあひはじめ  
て大にわるき日なり

正月うし 二月ね  
三月ぬ 四月いぬ  
五月とり 六月さる  
七月ひつじ 八月とら  
九月うし 十月ね  
十一月ゐ 十二月いぬ

# は一 破軍星

北斗破軍七星ともに明らかなれば  
国さかん也明らかならざればわざハひ  
多し傍に星多きをよしとす少  
けれバ人民おそれあり北斗の魁  
星の間黒きうるほひの雲なれば  
其夜雨ふる北斗の前に黄なる  
雲気あれば翌日風吹べしもし  
潤へバその夜かならず大雨ふるべし  
もし黒黄白淫色の雲長さ三丈  
余北斗をまとひてちらざれば  
三日の内にならず雨降るもし  
雨なければ人民安からず雲気北斗  
をおほひ青黒色あれば大雨ふる黒  
色風多し黄白色ハ明日大にあつ  
し白雲北斗の柄の間をさへぎ  
れば三日の内大風ちりをひるがへす  
象也△世俗北斗と北極とこんじて／ひとつとおぼへたる人あり別也▽  
破軍の星くりやうの事  
はぐんハ前にもいふ如く北斗七星也  
天の殺罰の氣を司どる星なり  
故に此星の劍先のむくかたの草木  
までもしづミたをるゝとなり故ニ

一切の勝負にのぞミつゝしミて  
いミさくべし其くりやうハ四時さつ  
て月の数と覚ゆべしたとへバ  
昼の午のときにはくんにむかへる  
方をしらんと思はゞ午未申酉これ  
にて四時なり此四時をすてゝ次の  
戌よりくる也月の数ほどゑとを  
かぞへそのあたるゑとのかたに劍先  
ハむく也たとへバくり時六月ならバ  
正月を戌二月を亥三月を子  
四月を丑五月をとら六月ハ  
卯也此あたるかたに劍先むくなり  
卯ハ東なれば東のかたより西にむく  
べからずとかく劍先を我うしろに  
して万事取かゝれば勝利を得る  
といへり軍陣のミの事ならず万事  
にかゝれりといへり

# は二 八将神の事

素戔鳴尊稲田姫をめとり給ひて八将神を生給ふ  
といふ又陰陽家に云處ハ天竺の所に国あり九桐と号く  
其国に園ありその園中に王あり吉祥と云則牛頭天王  
なり娑羯羅竜王の女をめとりて△頗利才女にて／則年徳神也▽后とし  
給ひ  
八王子を生給ふこれハ将神なりと簠簋理諺抄に委しく  
見えたり猶八将神の伝ハ左にくはし  
大歳神  
子の年ハ子のかた丑のとしハ  
丑のかた也余ハ准じてしるべし  
大歳神は木星の精歳君也此方にむかひて万よし但し

木を切らずこれ木星の精なればなり

大將軍

とらうたつとしハねの方

なり余ハ准じてしるべし

大將軍ハ大木星の精也此かたにむかひて造作わたまし井堀  
かまぬりにわろし又死人を此方へおくるべからず俗に云三年  
ふさがりとて百事なすべからず拾芥抄にいはいくもし他の領  
分に宿留する事四五十日の後件の所より此方にむかひても

造作わたましなすべからずといへ共本より太白星ハ金氣の  
精なる故殺罰をつかさどりよつてこれにむかひそむけハ  
たゞりも甚し大事の方ゆへ暦にふさがりと記す

○大將軍遊行日の事

春 △甲子の日より東に遊ぶ事五日にして／己巳の日本處へかへる▽

夏 △丙子の日より南に遊ぶ事五日にして／辛巳の日本處にかへる▽

土用 △戊子の日より中央に遊ぶ事五日にして／癸巳の日本處にかへる▽

秋 △庚子の日より西に遊ぶ事五日にして／乙巳の日本處にかへる▽

冬 △壬子の日より北に遊ぶ事五日にして／丁巳の日本處にかへる▽

右遊行日を深く慎むべし又大將軍ハ一処に三年づゝおハしませ

ども春の甲子の日より五日が間東方に遊行し給へバ五日が間東

の方ふさがりと知べし其間ハふさがりのかたにミなし本地他化自在

天なり依て大將軍戌亥のかたにある年ハ雨多し辰巳に有

年ハ豊年也此かた抛なく用ゆる時ハ右遊行日におこなひてよし

大陰神

上ニ準ずべし

大陰神ハ七星の精にして大歳神の後也此かたにむかひ

産をせず婚礼其外すべて婦女の事にいむ其外ハ更に

さハリなし学文の上にハ尤よろし午のかたにある年は

大豊年也子のかたにある年ハ土剋水の理して凶年なり

歳刑神

上に準ずべし

歳刑神ハ本地堅牢地神にて水星の精なり殺罰をつかさ  
どる方なれば一切種をまかず土をうごかさず未申の  
かたにあたれば中年なり子のかたにあたれば

雨おほし卯のかたにあたるとしハ雷おほし

つゝしむべし

歳破神

右に準ず

歳破神ハ阿白水神にて土星の精なり大歳の向ひに有  
て寅申巳亥の年ハ咎なし子午卯酉の方に当ればかろし

丑未辰戌はおもし此方に向ひて船にのらずわたましせず牛馬  
畜類を求めず辰巳のかたハ秋大風有丑寅の方ハ豊年也

歳殺神

右に準ず

歳殺神ハ本地大威徳明王にて金星の精専殺罰を司る  
なり此かたより嫁をむかへとるべからず子の方にあれば夏雨多し

午のかたにあれば雷多し秋風あれど五穀熟し佃大に安し

世上繁榮して万よししかし此方を犯せば私にわざハひ甚し

黄幡神

右に準ず

黄幡神ハ本地摩利支天なり羅睺星の精にして常に  
丑戌未辰の方にめぐつて余のかたに行ず土を司る神ゆへ色

をもつて黄幡と云故門を建土をうごかし取るにあし

弓を射初るによし又陣幕開き初など大によし

但財宝を出し納るにハ大に忌べし

豹尾神

右に準ず

豹尾神ハ本地三宝大荒神也計斗星の精にして黄幡  
のむかひ合の方也動静疾速豹尾の如し此かたに

向ひて大小便せず畜類を求めず媳女をむかふべ

からず一切の不浄をかたくつゝしむべし  
**は三 彗星**

左伝に天のけがれをのぞくと  
ありて天の筭也多くふるき  
をあらためて新らしくする  
なれば火事を司る也しかし是ハ  
新に出来る物ならず星の地に近  
き処の人の目に光りを見るのミ元來  
地気の乾燥の氣を以なり日の  
光りをうけてなる故夕ハ東へさし  
曉ハ西にさす乾燥の氣故火災  
をおそれ又災害の甚しきもの  
として恐るしかし治世に出て何の  
事なきを覺ふ事もあり全体  
星よりハひくきもの故清土に  
ありて本朝にみえす東國に有て  
西國に見えわかざる事もありとぞ  
**は四 八專の事**  
八專とハ十二日比和する日八日あり  
八ツを專にするといふころにて  
八專とハ申也比和とハ壬ハ水ヾ子ハ水ヾなり  
申ハ木ヾ寅ハ木ヾ如斯干支比和する事也  
其中に比和せざるもの四日有て  
間日と云たとへバ癸ハ水ヾ丑ハ土ヾこれ  
土剋水也わづか十二日のうち比和す  
るもの八日あり陰陽交泰比和する  
故多く雨天がち也一年に六たび  
あつて七十二日也世の諺に照入り  
八專降八專また降入八專照八專

とて八專の入日雨あれバ多くは  
八專中日和なり八專に入日天  
氣よければ中降也只八專ハ  
二日目が日和定め也されバ八專次  
郎とて二日目の雨をきらふ也

八專を覚ゆる歌

壬の子に人亥の日あくまでに

丑辰午と戌の日ハ間日

**は五 八十八夜の事**

立春より八十八日め也此日を目的  
として前後の日立ハ土地の高低

年の寒暖を斗て生綿を蒔

なり大体此前後霜降止なれ

バ諺にも八十八夜の名残霜

といふなり

**は六 半夏生の事**

此日房欲を断て菲葦を食せず

獸肉をくらはず何にてもけがら

ハしき事をなすべからず畿内の

農民今日餅団子を作りて

はんげしやうの賀儀をいはふ

これ稲苗を植終りて西収の

期をまついはひなりといへ

り他邦もしかりや

**は七 柱立の大事**

柱立ハ毎月神外に立てよし

此神外といへるハ大吉日にて左の通

正月ハ子の日也余ハ是に准じ

心得べし

正<sup>△</sup>ね<sup>▽</sup> 二<sup>△</sup>うし<sup>▽</sup> 三<sup>△</sup>とら<sup>▽</sup> 四<sup>△</sup>う<sup>▽</sup> 五<sup>△</sup>たつ<sup>▽</sup> 六<sup>△</sup>み<sup>▽</sup>  
 七<sup>△</sup>むま<sup>▽</sup> 八<sup>△</sup>ひつじ<sup>▽</sup> 九<sup>△</sup>さる<sup>▽</sup> 十<sup>△</sup>とり<sup>▽</sup> 十一<sup>△</sup>いぬ<sup>▽</sup> 十二<sup>△</sup>み<sup>▽</sup>

まづ柱を立るに

春<sup>△</sup>ハ 南北西東と立てよし  
 夏<sup>△</sup>ハ 北南東西と立てよし  
 秋<sup>△</sup>ハ 東西南北と立てよし  
 冬<sup>△</sup>ハ 西東南北と立てよし

柱立文

南無阿加度 阿羅漢

扱不動慈救の文を七返

となへて中の柱の根を三

ツうつべし

## は八 爵日の事

此日きしやうせいもんせずと云あく日なればつゝしむべし  
 〇きのえさるの日ハ水性木性によし火性わろし〇きのと  
 のとり此日ハ水性木性によし火性わろし〇ひのえね水性木性によし  
 〇ひのえむま火性わろし〇ひのとゐ土性金性によし  
 水性わろし〇つちのえとら土性金性ハよし〇つちのえミひつじ  
 火性土性ハよし金性わろし〇かのえむま土性金性ハよし  
 水性わろし〇かのとのミ金性水性ハよし木性わろし〇ミづ  
 のえたつ水性木性ハよし〇ミづのえいぬ水性火性わろし〇ミづの  
 とのうし木性火性よし土性ハわろし

## は九 柱立家造善悪の事

きのえね <sup>△</sup>水性よし/<sup>▽</sup>木性わろし<sup>▽</sup>  
 きのえたつ <sup>△</sup>土性よし/<sup>▽</sup>金性わろし<sup>▽</sup>  
 きのとのう <sup>△</sup>木性よし/<sup>▽</sup>土性わろし<sup>▽</sup>  
 つちのえいぬ <sup>△</sup>火性よし/<sup>▽</sup>土性わろし<sup>▽</sup>

かのえね <sup>△</sup>金性よし/<sup>▽</sup>水性わろし<sup>▽</sup>  
 かのとのう <sup>△</sup>火性よし/<sup>▽</sup>土性わろし<sup>▽</sup>  
 ミづのえとら <sup>△</sup>水性よし/<sup>▽</sup>木性わろし<sup>▽</sup>  
 ミづのとのう <sup>△</sup>水性よし/<sup>▽</sup>木性わろし<sup>▽</sup>  
 きのえとら <sup>△</sup>木性よし/<sup>▽</sup>火性わろし<sup>▽</sup>  
 きのとのうし <sup>△</sup>水性よし/<sup>▽</sup>木性わろし<sup>▽</sup>  
 つちのえね <sup>△</sup>土性よし/<sup>▽</sup>金性わろし<sup>▽</sup>  
 つちのとのとり <sup>△</sup>金性よし/<sup>▽</sup>水性わろし<sup>▽</sup>  
 かのえいぬ <sup>△</sup>水性よし/<sup>▽</sup>木性わろし<sup>▽</sup>  
 ミづのえね <sup>△</sup>木性よし/<sup>▽</sup>火性わろし<sup>▽</sup>  
 ミづのとのうし <sup>△</sup>木性よし/<sup>▽</sup>火性わろし<sup>▽</sup>

## は十 八岡神の事

此方にむかひて家づくりわたましなどする時ハ家内の人八人  
 死するといへりふかく慎むべし扱此くりやうハたとへバ子の日  
 ならバ其日の多とより四ツ目にして則子丑寅卯と卯の  
 かた也又卯の日ならバ其日の多とより六ツ目にあたる也されバ  
 卯辰巳午未申と則申のかた也余ハ是に准じ左に誌す如し  
 子丑午未の日ハ四ツ目 寅卯申酉の日ハ六ツ目  
 辰巳戌亥の日ハ八ツ目也

## は十一 拝殿舞殿を造る日

きのえむま つちのえとら  
 かのえね ミづのえむま  
 ミづのとのとり

## は十二 袴着元服髪置吉日并忌べき日

吉日 きのえむま きのとのミ ひのえうし  
 ひのえひつじ ひのとのむま かのえね  
 かのとのゐ ミづのえとら ミづのとのう  
 又曆中段のたつなる  
 あしき日曆中段の除くとり此両日いむべし



## は十三 腹帯する日

きのえね きのえいぬ きののうし  
 ひのえむま ひのえいぬ つちのえいぬ  
 つちのえね かのえいぬ かのえね  
 かのとのとり 曆中段なる ミつ／たつ  
 巳上よき日なり

こむ日 ちいミ 又曆中段にて  
 あやふ のぞく やぶる

巳上あしき日なり

## は十四 万福日の事

此日ハ酒を造りあきなひ事大によし尤曆にハ載  
 ずといへ共簾簾にありてかならず用ふべき日なり

正<sup>△</sup>ね<sup>▽</sup> 二<sup>△</sup>うし<sup>▽</sup> 三<sup>△</sup>とら<sup>▽</sup> 四<sup>△</sup>う<sup>▽</sup> 五<sup>△</sup>たつ<sup>▽</sup> 六<sup>△</sup>ミ<sup>▽</sup>

七<sup>△</sup>むま<sup>▽</sup> 八<sup>△</sup>ひつじ<sup>▽</sup> 九<sup>△</sup>さる<sup>▽</sup> 十<sup>△</sup>とり<sup>▽</sup> 十一<sup>△</sup>いぬ<sup>▽</sup> 十二<sup>△</sup>あ<sup>▽</sup>

## に二 二十四節並七十二候図説

一ヶ月の内十五日づゝに季節かはる是を  
 廿四節と云其十五日を五日づゝに分て  
 一年七十二候となり天地の間替行也

△正月／節▽ 立春△昼四十三刻五十分／夜五十六刻五十分▽  
 △正月／中▽ 雨水△昼四十五刻五十分／夜五十五刻五十分▽  
 △二月／節▽ 啓蟄△昼四十七刻五十分／夜五十二刻十分▽  
 △二月／中▽ 春分△昼五十刻／夜五十刻▽  
 △三月／節▽ 清明△昼五十二刻十分／夜四十七刻五十分▽  
 △三月／中▽ 穀雨△昼五十四刻十分／夜四十五刻五十分▽  
 △四月／節▽ 立夏△昼五十六刻十分／夜四十三刻五十分▽  
 △四月／中▽ 小満△昼五十八刻二十分／夜四十一刻四十分▽  
 △五月／節▽ 芒種△昼六十刻二十分／夜三十九刻四十分▽

△五月／中▽ 夏至△昼六十五刻／夜三十五刻▽

△六月／節▽ 小暑△昼六十刻二十分／夜三十九刻四十分▽

△六月／中▽ 大暑△昼五十八刻二十分／夜四十一刻四十分▽

△七月／節▽ 立秋△昼五十六刻十分／夜四十三刻五十分▽

△七月／中▽ 處暑△昼五十四刻十分／夜四十五刻五十分▽

△八月／節▽ 白露△昼五十二刻十分／夜四十七刻五十分▽

△八月／中▽ 秋分△昼五十刻／夜五十刻▽

△九月／節▽ 寒露△昼四十七刻五十分／夜五十二刻十分▽

△九月／中▽ 霜降△昼四十五刻五十分／夜五十四刻十分▽

△十月／節▽ 立冬△昼四十三刻五十分／夜五十六刻十分▽

△十月／中▽ 小雪△昼四十一刻四十分／夜五十八刻二十分▽

△十一月／節▽ 大雪△昼三十九刻四十分／夜六十刻二十分▽

△十一月／中▽ 冬至△昼三十五刻／夜六十五刻▽

△十二月／節▽ 小寒△昼三十九刻四十分／夜六十刻二十分▽

△十二月／中▽ 大寒△昼四十一刻四十分／夜五十八刻二十分▽

## に二 二十八宿略解

二十八宿ハ天の四方にしきつらなりたる星にて天下の

事理これによりこよみの吉凶ハ其月其日に此星の

あたれるをもつて定められたりとぞ

角

角の二星ハ東方に有て廿八宿第一の宿也

明らかなれば大平也うごく時ハ国安からず

といへり

亢

亢の四星あきらかなれば四海化に帰す臣下

忠にして人病なしうこけバ病多し見え

ざればかんばつす

氐

氐の四星明らかなれば大臣后妃君に奉

じて節を失はずもし見えすうつり  
うごけバ内乱るゝとなり

房

房の四星明らかなれバ王者あきらか也

●星六なれバつゝしミ有●星ハ左右  
にある星なり

心

太子 天子 庶子

中の星あきらかなれバ道さかん也前の星明ら  
かならざれバ太子位を得す後の星明らか  
なれバ庶子位をつぎ給ふしるしとなり

尾

尾星の色ハそろふて明らかなるをよしとす  
うごきうつる時ハ国のうれひとすといへり

箕

右七宿東方にあり

箕の四星明らかなれバ五穀熟し君臣  
安しくられバ米穀高し

斗

斗星ハ清明なれバ君臣を重んじ心をひ  
としようして天下泰平也くらくになれバ宰相  
のうれひありとぞ

牛

牛星大なれバ王道さかん也曲れバ五穀実  
のらず明らかなれバ豊年也

女

女星明らかなれバ天下豊にして女工さかん也  
うごけバ婦女殃多し難産に死する者多しとぞ

虚

虚星あきらかなれバ天下安しうごけバ

疫死の人多しとぞ  
危

虚危の二星もと死喪哭泣を司どる火を  
守れバ王者兵を行ふ金を守れバ飢饉水  
を守バ下上をはかる日月五星を犯せバわざハひ有  
室の二星明らかなれバ国さかん也小にして  
明らかならざれバ鬼神祭をうけず疫癘  
流行すといへり

壁

右七宿北方ニあり

壁星明らかなれバ小人しりぞき君臣登  
揚せらる文華さかんにして大に道おこる

くらけれバ文道おとろへ小人すゝむ也

奎

奎星明らかなれバ天下泰平也大きに  
文武おこる星角あれバ政事たゞし

からず

婁

婁星あきらかなれバ国やすし直なれハ  
わざわひ多し

胃

胃星明らかなれバ四時和平也天下たいらか  
にして民安くくられバ五穀実のらず

昂

昂星明大なれバ国民安く天下和平也  
あきらかならざれバ讒を入らるゝ事ある

べしとぞ

畢

畢星あきらかに大きけれバ夷狄来り貢  
し天下泰平也うごけバ長雨ふり洪水

のうれひあり

贅

贅星明らかなれば豊年なりうごけば  
大にひでりし国やすからず

参

右七宿西方ニあり

参星明らかなるをよしとせずほのくらきを  
をよろこぶ也明大なるときハ讒入られ君子  
位をしりぞけらるゝといへり

井

井星明大なれば封候国を建ついろを

うしなふ時ハ風雨のわざハひ甚しといへり

鬼

鬼星明大なれば五穀豊熟し不明なれば

バ人民帰化せずうごけバ人くるしむうつれ

バうれひ多しといへり

柳

柳星明大なれば人民酒食をゆたかにす

色を失へバ凶年三年をまたず五穀大に尊し

星

星の七星明大なれば王道さかん也くらければ●

良のぞミを失ふ色をうしなへバ后妃難あり

張

張星明大なれば国家さかんにしてつよし

色をうしなへバやすからずうごけバむつかし

うつれバ讒人はびこれりと云

翼

翼星明大なれば礼楽おこり四夷来朝すうご

けバ蛮夷来るいろをうしなへバ民うれひ有

軫

右七宿南方にあり

軫星あきらかに大なれば天下さかん也万民

やすく四海王化に帰し康寧なり

### に三 日食の図説

日食といふハまづ日ハ高く月ハ低し

日の下に月あつて日の光見えざる也

月日のめぐりによつて次第にかくる也

日食ハ朔日二日三日迄の内にあり新

渡清土の売暦にハ日食を誌さず故に本朝の俗清朝にハ日食

なしと思へるハ非也官暦にハミナ日食を出せり夫日食ハ朝家の

災異なれば記さざるか阿蘭陀のこよみにハ日食を出せり

### に四 虹蜺の説

漢書天文志に曰虹蜺ハ陰陽の精也

色あざやかなる物を雄とし虹といふ

色くらき物を雌とし蜺といふまた

朱子曰虹ハ日と雨と交りて條然

として質をなす也虹ハ日の映ずる處にしたがふ故朝にハ

西にあらハれ夕にハ東に見ゆる也又棒虹とて立あらハるゝ物

あり大風津浪の災ありといへり○正月虹を見れば七月に

到り米の価高し○一月虹を西に見れば五穀価尊し○三月

虹を見れば米の価魚肉より尊し○四月虹を見れば五穀価

高し○五月虹を見れば大麦小麦価尊し○六月虹を見れば

バ麻の価大に尊し○七月虹を見れば米の価高し

○八月虹を見れば春に到りて粟の価尊し○九月十月虹

を見れば麻の価尊し又ぎこく高し○十一月虹を見れば豆

の価尊し○十二月虹を見れば米の価尊し

○雨久しく降て夕に虹を東方に見ればはるゝしるし也又晴天

久しくつゞきて早するに虹を西のかたに見れば雨降也虹下より

のぼれば朝に雨とまると又朝西にのぼれば翌朝雨降なり



○為虹象試る法あり是ハ晴天にて風なくおだやかなる日に水を口にふくみて日にむかひ霧の如くに吹バ水気の中に必ず赤く青く緑にいろ／＼の色をあらハし虹の象の如く見ゆる物也虹ハ則雨まさに晴んとして象をなすもの也

## に五 如意

宝珠図説

●環曆に曰三●の宝珠形は

曆の祝義にまづ是を画く

その中央ハ天星左ハ色星右

ハ多願なりと云天星玉女

ハ諸願成就諸事祈禱に此方を

用ゆ色星玉女ハあたらしき衣を

着し或ハ衣服をたつに此方を

用ゆ多願玉女ハ出行舟乗等

に此方を用ひてよし其方位ハ一ヶ月

ヅゝにてかはれり委しくハ曆便覧

にゆづりて爰に略す

夫如意宝珠と申ハ日月星の三光天地人の三才神儒仏の一体

園満の形則此玉にて万宝をふらす徳心の如くなる故春

の始吉方にむかひ富貴万福をいのり一切の諸願を乞もと

むるに成就せずといふ事なし夫故曆の始に画きて祝ふ也

三八天の極数にて一を越て三を函と易の十翼に孔子も説給ひし也

## に六 二百十日の事

立春より二百十日め也二百十日にかぎり風吹にあらずすべて

頃日ハ秋の暴風吹時分なるに殊更早稲の花盛りなれば

稲花を吹損なはれん事を恐れて四民共に此日を心にかくる

なり二百廿日ハ中稲のはな盛なりあながち十日廿日とかぎる

にあらず大体の頃をいふ也

## に七 入梅の事

入梅といへるハ本草綱目水の部時珍が説に五月の節の後始の壬の日を入梅とし六月節後壬の日を出梅とす則

三十三日目なり入梅雨の氣に中れバ病を生じ物其氣を受

れバ黴を生ずといへり故に黴雨ともいふ此余天中記及び

荊楚歳時記曆府通書などに入梅の説多かれど今の

新曆ハ右の説によりて日を定められたり

## に八 入学の吉凶

吉日 甲子春ハいむ／戌申 乙亥

／辰 丁丑／亥 戊子寅

己巳丑／未

曆中段 己巳 未 庚午／寅 壬午／寅

## に九 入部初知入日がらの事

吉日 甲寅 丙午 己酉 壬寅／癸巳 庚寅 辛卯 壬戌

## に十 如意満足日の事

春 戊子のえとら 夏 己子のえむま

秋 庚子のえさる 冬 辛子のえね

右の日は大吉日なり外のさはりありとも又くろ日にてても用

ひてくるしからず

## に十一 人神あり所の事

春 己亥のず 夏 己午のず

秋 己卯のず 冬 己酉のず

右の日灸をすべからずといふ

## に十二 人相九面の秘図略解

厚相

精神たくましき故に眼力つよし万の物を見る時しつかり

と見定め人に対して眼神すハリまぢろがず言葉のはし

あざやかにわかり肉しまりて体そハつかず大事に

おどろかず小事を等閑にせずたとへば大船の水上に

うかむがごとし静なる時ハ少も動かず行時ハ一瞬に百里を走るにひとし大に富貴の相なりとしるべし

威相

眼睛ひかり眼光人を射ると何となく対がたき様にて

声清く言葉あざやかに分り尻声ひびきありて

一呼百諾の権とて万人おのづから伏し敬ふ徳あり

つねに言葉すくなく形動揺す大山のごとく自然

と威儀敦重なり額高く光潤ゆつたりとしてはな

肉あつくしまりまゆ秀うるハしく耳あつく堅し

くちびる厚く四の字のなりの如しこれ威相なり人に

あなどられずものゝ頭と成次第に榮ふべし

清相

眼中すゞしく黒白きれいにわかり眉うるはしく耳

目より高き事一寸にして白くひかり髭うつくし

く法令ハ小ばなのうへなり／蔦のごとく下る筋也V正しくふかく観骨

高く

そびへひかり有ていろいろはしく心気おちつきて

ことばすくなく口びるいろくれないにして声濁ら

ず鼻すぢひづみなくとをりたるハ清相なりたま

しゐきよらかに心おちつきてしつかりと決断早し

これ君子の相也又これを貴相ともいへり

福相

清貧濁福とて福相ハ多分にごりたるもの也肉厚く

肥て肉をあらはさず瘦て骨をあらはさず精神たく

ましくけつしよくうるハしく声に力ありて身動

せずものにおどろかず肝ふとく鼻に肉ありて小鼻

少しいかりはなばしらふとくとをり眼力つよく

辺そ深くして穴仰き肩厚くひろく口三ヶ月の如く

両方上へあがり惣体しつかりと手厚くおとがい

肉たつふりとある人ハ福相としるべし

古相

観骨高く畢上げたたるが如く人中長く法令ふかく長

く眉にすぐれて長き毛まぢり見あげ皺ながく

顔色さつはりとして血色冷へ天庭高くうるハし

くつねにあかずふさぎ居印堂ひろく眼柔和

にしてすゞしく秀で気象高くいやしからず

耳より毛はへ出耳のうしろの骨高くおこる此

心おだやかにして命ながし誉高く人にうやまハれ

愛せらるべし名利を好まざる人なり

薄相

兒のひつはりうすく唇しろく目どみかじけ鼻

すぢおれくぼみ頤にくなくやせすぼり耳うすく

筋青くあらハれ首すぢほそく色やけじろふ

かミうすくまゆあれうすく人にむかひて兒を

対することなく声にごりかいなくもの云尻声

わからず眼力うすく氣しやうよハくこらへじやう

なく言葉多くしばらくもかたちおちつかざるは

ミな薄相とて貧相なり

悪相

眼三角にして三白也△三白とハめの黒玉上か下かに／付て左右と上

か下かに三所白しV眉○骨高く

まゆげふとくあらく口への字形に舟の覆たる如く

鼻に節立骨ありて鼻の先下へまがり鷹の嘴の

ごとく下へそり目つねに血ばしり○うしろの

方へはり出たる相法に脳後○を見るものハ人を殺す

とて大悪相なりと知るべし眉いかり歩行ぶり

いかめしく○するもの親に不孝にして工ミ事を

このミ人をそこなふものとしるべし

俗相

何となくむぎ／＼と額のはへぎハひきくはへさがりまゆ

こく目にごりはなのあなむかふよりあらハれ耳  
いたつてちいさくはなばしら目の間にておちこミ  
路をうつむきてあるきことば多くしてわかり  
がたし手の指先みぢかく先ふとく槌の子のごとく  
歯むきばにして舌ミじかく肉あまり或ハすぶたごへ  
にてむさく口到て大にしてしまり悪きものハ愚直  
にして心いやしく文旨にして義理の分らぬもの也

孤相

孤と云ハ親兄弟妻子券属に縁うすき人を云なり  
鼻いたつて高くそびへ人中溝なく惣体肉やせて  
骨高くあらハれ耳前へ起てりんくわくなく眼少  
くしゞまり眼力うすく観骨皺多く額に見上皺  
乱たる糸のごとく耳くろく瘦ていろあしく血色  
晴気とてつやなくこげたるいろなりまた快活色  
とててら／＼としたる様に兒の皮うすくひつはりたる  
ごとき人ハことな孤相なりと見るべし

相法九面の説

右九面の図ハ世上の人相者流の徒より杜撰の迂遠の事の  
様にいへども唐の昔楚の莊襄王の臣下に州犁伯と云人ありし  
が人をよく相する事神の如し莊襄王宣く寡人荀子が非  
相の篇を見れハ世に相法といふ物さらになかるべし然れ共汝が人  
を相する事毫末もたがはずいかなる故ぞと問給ふ犁伯こたへて  
いはくそれ人の骨格をもつて人相を見る時ハあやまり少からず臣が  
人を相する事ハ相を相せず其行ひを相するのミ也実に其人々  
の常の行ひを見て行末をはかり見るに少しもたがふ事なしと  
いへり爰をもつて見る時ハまづ此九面の道理を推て考へまなば  
バ浅く入て深きにいたるべし

に十三 人神ある日の事

朔日 足のゆび 二日 足のくるぶし

三日	身のうち	四日	わき
五日	くち舌	六日	手のゆび
七日	つぶし	八日	足うで
九日	しり	十日	せなか脇
十一日	はな	十二日	髪のはへぎハ
十三日	きバ	十四日	胃の腑
十五日	ひたい	十六日	むね乳
十七日	臍が下	十八日	股腹の内
十九日	足	廿日	膝ぶし股の内
廿一日	手の小ゆび	廿二日	臍より下
廿三日	九のず	廿四日	手
廿五日	足	廿六日	胸手足
廿七日	膝	廿八日	● 臍より下足
廿九日	ひざわき	晦日	頭のど
きのえきのとの日ハ			かたむね
ひのえひのとの日ハ			はら
つちのえつちのとの日ハ			もく
かのえかのとの日ハ			わきあし
ミづのえミづのとの日ハ			丑の日ハ
子の日ハ	目		おとがゐ
寅の日ハ	せなか		卯の日ハ
辰の日ハ	もく		巳の日ハ
午の日ハ	むね		未の日ハ
申の日ハ	こし		酉の日ハ
戌の日ハ	ひざがしら		亥の日ハ
暦の中段のぞくの日ハ男に			はな
いむやぶるの日ハ女にいむ。未の			
日灸をいむ			

## に十四 人相即座伝授

先人に対して其形容を見るに肥

ても肉をあらハさずハト云ハぶたこへ／きらふなりV瘦て骨

をあらハさす見ゆるを貴ふ也座に附て

居りたる姿大山の如く久しく居りて

動かざる様に見ゆるハ皆福人也心正しく

一生衣食足れりハ惣身足ひざなどをうごかし／かなふをびんぼうゆるぎと云てきらへり如此／人大に貧相也V座して膝がしらをすば

め

る人ハ心定まらず住所うごくなり。

座して膝がしらの広かる人ハ望大にして

散在次元来ふしまりなる人にて人の身

のうへをのミ込世話をやく也座して

居合こしなる人ハ分別なく心のおちつかぬ

人也座して尻のおちつかぬ人は

住処動家業定まらぬ人也座して

居形端正尻の落つき威儀とゝなふ

人ハ大福にて力あり座して寂しく

見ゆるハ貧なり

○音声の部

声ハそこに力ありてさハやかに静なる

を貴しとす○音声高き人ハ心正し

く声しまりありて大音なるハ大に

よし○口先にてはや口に物いふ人ハ貧

なり孤独にしてけんぞくそだゝず馬の

嘶く如く物いひ笑ふ人ハ心肝佞也散在す

○仕形咄しする人ハ嘘をいふ也○小声にて

人の咽の下へ入云ふ人ハ心に工ありて悪

心也○小児の小声にて物いふ物ハ心に毒

あり○男に女の如き言語なるハ散在して業をやぶる

○容貌の部

男に女の容貌あるハ悪し女に男の

姿有も同じく悪し夫を克する也

○常に特鼻樫を嫌ふ人ハ風雅を

好ミ万志まりなく散在す○尻垂

帯をする人ハ心みだりがハしく不義をな

す○人にむかひて顔を見ず応対す

る人ハ心に毒あり○うつむいて物云人ハ

貧也○如斯目頭なる人ハ養子也ハ上まぶた

のかしら図の／如く下へ廻るV耳りんなく廓高き

人又下齒如図中高なる人又頤

如此凹たる人已上何れも養子に行

べき相なり皆是重親の相とて親を

重ねる相也自分に独立して家業

を起す事成がたし○頭に悪骨なく顔

に善骨なしとて頭ハ峨々と聳へたるがよし

貌ハすこしにてもふしくれ立骨高なるハ

大に下相にして発達ならず然れ共

人相ハ一所二所あしき穴所ありても

外に吉穴あまたあれバ発達すべ

したとへハ福分充滿して学才

あり子孫なくて已長命にして無

病也妻妾美にして貞烈の賢婦

けんぞく数多ありて皆忠貞ならバ

人々満足する處なれど其如く

十分なる事ハ無き物也福者き

ハめて子少く貧者ハ子多し大

体ミな如此そろハぬもの也さるによつて



善惡の穴所を照らし合て考ふべし  
○印賞とハ眉と眉との間にて此

處也是を明宮と云て甚大事の

所也光りうるハしく瑕なく高く

むツくりとうるほひあるをよしとす

眉の間せまきハ短氣也心いら／＼

し豎に筋あるハ不実なりたてに

川の字の如き三筋ある人ハ他国にて

死すべし○印堂にほくろあるハ病身

也○印堂欠陥あるハ急死の相也

○眉より上を上停と云高く広く

むつくりと肉厚くうるハしきハ発

達の相なり三筋長く正しくすぢ

あるを妙とす四筋ある人ハ養子

の相也○人相を独見習ふべき術あり

先相学便蒙 人相小鑑 相法秘受解

これらの事を熟覽すれば独り

相法の術に達す独稽古の珍

書なるべし

### に十五 廿四節雲風にて大風供水知る

正月雲東へ行朝夕少しづゝ雲やけ

して雲黒く北の方度々時雨朝夕

七日十日風吹ハ無事也朝やけして

申酉の方に黒雲つかゆるハ五日七日東

風吹と知べし終にハ雨となる其雨上

りて西風となる夕やけハ西になり夜

七ツ時分水まきぐも少くなりても入ハこれ雨也

春三月のうちハ南の雲に氣をつけ

見るべし朝五つ時迄二南に黒雲たち

次第々々に広くなるハ是大風を起す想也

二月巳午の方より風同じく戻し

風も吹バ無事也春雨繁く風靜に

吹雨つよくなりて西風戻すなり

立春より四十日過九日の間に必ず風吹

物也此日數過てハ大方吹ざる物也天上

に雲なく●濁とし西より雨あがり風

破て浪大に來るこれ大事の日和也

三月霞のうちに西風久

しく大にありて苗代霞なく雲切て

一兩日吹き北になると其まゝ雨也

四月中旬過て寅卯辰巳より風吹

朝やけ夕やけするハ天氣也夜七ツ時分水

まき雲入てもはや雨降様に見えたり共

光り出すにおひてハ明日昼頃より日和也もし

寅丑の時に如此ならバ一七の間照也

五月の前に入て雲山をつゝミ雲厚く

煙の如くならバ雨しげし夕やけ雨となるつ

ゆあがらんとて雲黒く南風つよく

度々時雨し露あがるなり

六月土用内外辰巳より風吹ハ秋大風

を起す也辰巳より戌亥へ雲入ハ是

又秋大風の想也同中より七月節迄の内大

風あれバ秋供水の想としるべし

七月西風吹ハ無事なり風雲をま

とへハ大風となる秋東風吹ハ雨晚七

ツ時北に赤雲立ハ大風の想也雲多

く曇風吹されバ雨ふらず

八月節に入四隅ニ雲有て北風東風強

度々雨降ハ大風の想也但二八月ハ不定也



又北風吹度々時雨或ハ雲切て黒きハ無事也  
九月雨上り西風ハ無事也東風吹気色よき  
ハ雨也又十月中頃迄亥子の方より風吹ハ冬の  
起り也十月西風強く時雨雲気色悪共無事也  
十一月吹まハし風ハ無事也十二月大に寒  
共戌亥風吹ハ無事也午未の方より風  
吹戌亥へまハリ北風一兩日吹長閑二成  
陰の風夜に入ハ長閑也

### に十六 日夜善惡時ぐりの事

十二支善惡時くりハ次に委しく出すか如く王相死因老の五字  
をもつて善惡吉凶を知る也 王<sup>△</sup>大<sup>△</sup>吉<sup>△</sup>相<sup>△</sup>吉<sup>△</sup>死<sup>△</sup>半<sup>△</sup>吉<sup>△</sup>因<sup>△</sup>大<sup>△</sup>  
惡<sup>△</sup>老<sup>△</sup>半<sup>△</sup>吉<sup>△</sup>也其うちに  
相老の二字ハ待人かならず来る時也もし因の字にあたらバ番事不吉  
也  
つゝしミ忌さくべし扱此くりやうハ十二ヶ月とも其下にある始の字  
を  
朔日とさため二日三日と左へ横にくる也しかし其日によりて十二月  
の  
所へ到り先へつまらバ又正月の所へ戻り順にくる也たとへバ三月  
三日にくらんと思ハゞ三月の下  
始めの死の字を朔日と定め  
夫より横へ二日三日とくれハ則五月  
の下老の字三日にあたるこの  
くだりを上より下まで始に誌  
せし十二支と合せバ則寅と申  
の時王の字にあたりて大吉也  
卯と酉の時相の字にあたりて  
これ又吉なり巳と戌の時因の  
字にあたりて大惡なりかくの

如く何時にても右に准じて  
考ふべし始の十二支ハ則刻限に  
て子ハ夜九ツ午ハ昼九ツ時也

「本翻刻をなすにあたり、小番達先生(名桜大学国際学群)、篠田健一氏に数多御教示いただいた。ここに記して感謝申しあげる。  
『伊藤孝行(二〇一二)『翻刻『萬代大雜書古今大成』(二)』、『名桜大学紀要』十七、八六・一〇二頁

Reprinting: "Bandai Ozassyo Kokon Taisei" (3)

ITO Takayuki

This paper presents a part of the book entitled "Bandai Ozassyo Kokon Taisei", which was first issued in the Tenpo Period <1837-1858> rewritten in present-day Japanese characters.

Keywords:

Modern Japanese, Reprinting, Bandai Ozassyo Kokon Taisei